



イバダイ学

## イバダイ学からの仮説 2019

—茨城大学の将来ビジョンとその実現へ向けて—



イバダイ学

イバダイ学からの仮説2019 —茨城大学の将来ビジョンとその実現へ向けて—

茨城大学 みんなの“イバダイ学”プロジェクト

発行: 茨城大学創立70周年-創基150周年記念事業準備室

茨城県水戸市文京2-1-1 TEL:029-228-8811 E-mail:iba-70th@ml.ibaraki.ac.jp

茨城大学 みんなの“イバダイ学”プロジェクト

## 一はじめに 茨城大学がイバダイを学問する

この冊子は、茨城大学の創立70周年記念事業である「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」から導き出された茨城大学の将来ビジョンとその実現へ向けたアプローチを、2019年5月時点における「仮説」として示し、さらにその視点から現在の茨城大学の到達点と課題をレビューするものです。

茨城大学は1949年5月31日に開学し、2019年で創立70周年を迎えます。2009年の創立60周年の時には「大学憲章」を制定しましたが、それからの社会の変化は一層速く、大きくなり、70周年という節目において、改めて茨城大学の将来ビジョンをつくるという構想が生まれました。しかし、大学への期待・要請が著しく多様化する中、何十年も先を見通した固定化したビジョンをつくることは必ずしも有効ではなく、むしろ大学とは何かを問いつづけ、地域の中で共有していく継続的な取り組み自体をつくることが大切だと考えました。それは、仮説を立て、検証し、さらに批判するという「学問」と同じ営みであり、そこから「イバダイ学」という発想が生まれ、2018年7月、「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」が始動したのです。

このプロジェクトの運営メンバーは、学内での公募に対して手を挙げた、15人（2019年3月現在）の教職員です。まずはこのメンバーで、「イバダイ学」を考えるための問い合わせを開始しました。そこから生まれた問い合わせは、「残る『知』とは何か?」、「大学における『学び』とは何なのか?—過去・現在・未来?」、「いばらきのイノベーションと雇用—大学は何ができる?」、「グローバル化ってしなきゃいけないんですか?」、「地域空間と大学—キャンパスは進化する?」の5つです。そして2018年12月22日、これらの問い合わせについて地域の方々と学生、教職員が一緒に考える場として、「みんなの“イバダイ学”シンポジウム」を開催しました。

このシンポジウムでの基調講演に、オックスフォード大学の苅谷剛彦教授を招いていました。苅谷氏は、政府などによって示された抽象的なキーワードになびいてしまう「エセ演繹型思考」を批判し、世界の知識、ナレッジ（Knowledge）の生産・継承・再生産に参加しているという自覚を大学がもつべきだと語りました。それは、私たちの主体性とは何か、ということを鋭く問うメッセージでした。

その後、シンポジウムの議論を振り返り、茨城大学の現時点での将来ビジョン—「イバダイ学からの仮説」をつくる作業を進みました。この冊子ではその内容を紹介していくが、先取りしてしまうと、「知が本来もつダイナミズムを最大限發揮させ、創造的な地域をつくる」ため、茨城大学はその駆動役となるのだ、というビジョンです。そしてその目標へのアプローチを3つのフェーズに整理して示し、それに沿って茨城大学の到達点と課題を検証しました。

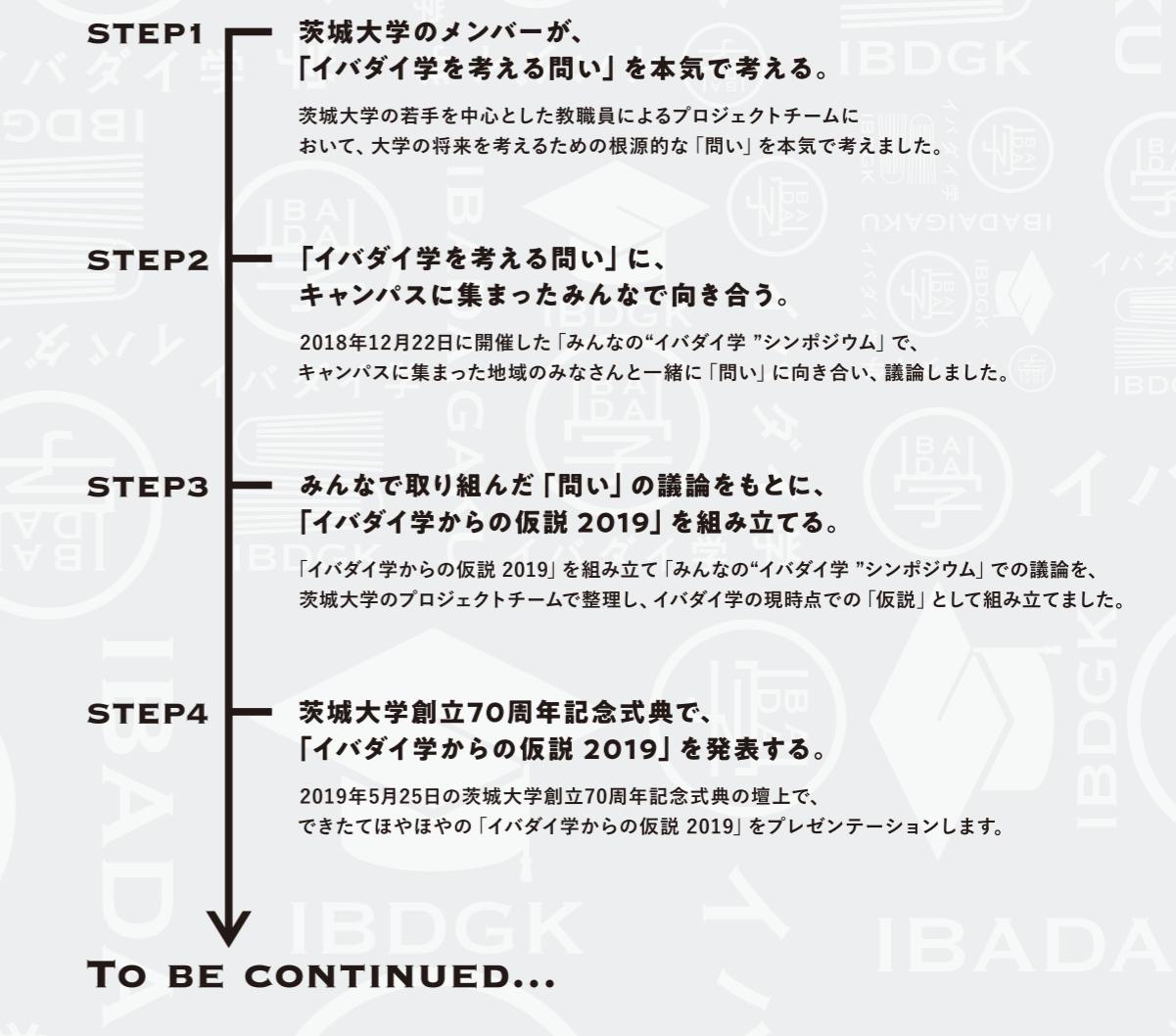
そもそも「イバダイ学」自体が、「知が本来もつダイナミズムを最大限發揮させ、創造的な大学をつくる」試みの一環であると考えます。国立大学は、法人化によって自律的な運営が標準化されたにもかかわらず、近年は、他者が定めた尺度によるランキングでより上位を目指すことが目標となりかねない状況すらあります。「イバダイ学」は、その中で、目的を見失わず、主体的に考え、判断する大学であることの重要性を示唆しています。

こうしたビジョンを共有し、教職員や学生が地域の人々とともに課題を考え、判断し、行動すること、やがて、ここで示す「仮説」も検証され、茨城大学が社会の中でより必要とされる存在となることを目指します。そして、そのように主体的に学ぶ大学と社会との間の知の循環のプロセスを、「イバダイ・モデル」として発信していくことを願っています。

2019年5月  
みんなの“イバダイ学”プロジェクト

## “イバダイ学”的シラバス

大学とは何か、茨大は何をめざすのか、というのは、正解のない問い合わせであり、だからこそみんなで考え続けなければなりません。  
「イバダイ学」という学問も仮説と検証の繰り返し。  
そのときどきの知恵を結集して将来を描き、茨城大学のあるべき姿の「仮説」を立て、探求しつづけます。



2019年度後期には、「イバダイ学」は大学の正式な授業にもなります。茨城大学の歴史やありようを振り返りながら、大学は社会の中で何をなすべきか、イバダイはどうあるべきかを学生とともに考えていきます。  
2024年の創立150周年の機会などには、さらなる仮説を示し、検証していきます。





イバダイ学

### —イバダイ学からの仮説—

## 知が本来もつダイナミズムを最大限発揮させ、 創造的な地域をつくるための駆動役に

現在、人口減少、グローバリゼーションのゆくえといった社会状況の変化、気候変動のような自然環境の変化、Society5.0のような科学技術の進展に伴う社会の変化がひしひしと私たちに迫っており、将来が見通せないという不安が社会を覆っています。かつて大学には、社会の課題に対して専門家集団として適切な解を示したり、そのための専門家を育てたりする役割が期待されていました。しかし、いま私たちが直面している複雑な課題は、いずれも「正解がない」問いです。答えのない問題に社会全体で挑むとき、真理を探求する場としての大学が果すべき役割は、適切な問い合わせを設定すること、さらには、その問い合わせとともに多様な知を集め、議論やコミュニケーションを生み出し、多くの人たちが自分たちの生活や社会についての選択や判断において、納得度や満足度を高められるように努めることではないでしょうか。

ここにおいて、「知」というものを、必要なときに引き出しからさっと取り出して使う道具、あるいはハードディスクに保存されたデータのように「静的な」ものと考えるべきではありません。「知」は、知識やデータそのものではなく、それらの多様な見方を提示するものです。また、必要な場所にあわせてそれらの使い方を生み出し、社会実装の蓄積に

よって次の進化を遂げるダイナミズムをもったものです。ここに、正解がない問い合わせに挑む上で不可欠な「知」の役割があり、大学と社会とが知の循環をつくる意味があります。

現代の社会では、知や科学への信頼が低下しがちです。しかし、持続可能な開発目標(SDGs)やSociety5.0といった社会的な大きなうねりを新しい地域づくりに結びつけるためには、今一度、知をダイナミックなものとして捉えなおし、地域の人びとの生活や歴史と関連づけながら、知のパワーを最大限発揮させなければなりません。知のパワーにより創造的な社会を実現する、その駆動役となることが「イバダイ」が目指す姿であると私たちは考えました。

私たちは、このビジョンの実現のために、次のページで説明するような3つのフェーズによるアプローチを考えました。合わせて現状を把握するため、茨城大学のこれまでの教育・研究の到達点をこのフェーズに沿ってレビューしました。

このビジョンを実践、検証していくことが、地域の活力を高めて創造的で持続的な地域の実現につながり、それには必要不可欠な要素としてのイバダイの存在意義も高めると考えます。これからも地域社会から熱い期待が寄せられるイバダイであるため、私たちはしっかりと歩みを進めています。

## イバダイが取り組む3つのフェーズ



「知が本来もつダイナミズムを最大限発揮させ、創造的な地域をつくる」ために、その駆動役としての茨城大学のアプローチを、3つのフェーズで示します。

イバダイ学の議論においては、「知」を社会基盤とすること、大学は自ら「知」を生産・継承・再生産していく使命をもつことを強く認識し、3つのフェーズの構造では次のような観点を重視しました。すなわち、①実社会に役立つこと、実装に従属するものとして大学の知を捉えるのではなく、まずは「知」そのものと向き合うことから出発すること、②それによって「知」のダイナミズムを活かす形で新たな実装へつなげること、③大学としてこれらの喩を俯瞰的に捉え、社会が自ら活用できる新たな知見としてアウトプットすること、です。



フェーズごとの詳しい内容は次のページから紹介いたします。





## 俯瞰的視野をもつ人の育成と それに必要な 本質的な研究・探究

### PHASE1 解説

イバダイ学の3つのフェーズでは、1→2→3という明確な展開方向を想定しています。大学の役割を考える上で、実装や応用を前提とするのではなく、研究・探求を出発点としています。それは、人類が生み出してきた知に、私たちの人生と社会を豊かなものにする力があるのだという信頼に基づいています。ただし、急速な変化が進行する現代では、狭い専門領域をこえた俯瞰的な知が求められ、そのため、それを可能にする新たな研究のフレームを生み出す必要があります。この協働作業に出自や背景の異なる多様な人が参加すれば、それだけ多様な知が生まれるでしょう。そのため、大学の教職員、学生のジェンダーやエスニシティの多様性を高めていくことも大切です。教育においても、各専門分野の知見を深めるとともに、俯瞰的な広い視野を育てる新たな教育システムやカリキュラムを開発していくべきです。広い視野をもつ学生を多く育てることが、第2フェーズの多様なアクセスポイントの創出につながります。

### 茨城大学の到達点と課題

#### 「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」によるレビュー

茨城大学では2015年、ディプロマ・ポリシー（学位授与要件）として5つの茨城大学型基盤学力\*を設定しました。その一番目にある「世界の俯瞰的理解」を、私たちは最も重要な要素と考えています。二番目が「専門分野の学力」です。すべてのカリキュラムは、このディプロマ・ポリシーをもとに構成されていますが、一方でそもそも「世界の俯瞰的理解」とは何か、具体的にどのような教育方法が適切なかは本質的な問い合わせであり、さらに検討が必要です。また、研究者同士の協働については、量子線科学や気候変動科学などで、所属学野や学問領域をこえた研究者の集団を組織し、教育・研究の取り組みを通じて日常的なコミュニケーションを行う態勢をつくりあげました。近年は、産学官連携の専任教員やURA（University Research Administrator: 研究支援専門職）、コーディネーターも活躍して、離れたキャンパス間での知の交流の機会づくりが進められています。たとえば2018年度に開始した「アオゾラ連携プロ

ジェクト」は、異分野の研究者のコラボレーションのために情報と交流を可視化するイベントです。学内の構成員の多様性拡大については、2016年度にダイバーシティ推進室を開設し、女性の教職員への積極的な支援の取り組みを進めています。入管法の改正により地域住民の外国人割合が増えることも予想されますが、大学における外国人の学生・教職員や大学施設の利用を増やしていくことも今後重要になります。また、障害をもった学生への支援体制も整え、多くの学生たちが「アクセシビリティ・リーダー」として活動しています。一方で、3つのキャンパス間の物理的距離による制約は大きく、今後も最新のICTツールの活用や、コミュニケーションイベントの企画によって、制約を乗り越える方法を開発する必要があります。また、学問領域をこえた協働を導く切り口として、AIやデータサイエンスにかかる取り組みを組織化することも求められます。

\*世界の俯瞰的理解、専門分野の学力、課題解決能力・コミュニケーション力、社会人としての姿勢、地域活性化志向の5つ。





## 多様なアクセスポイントにおける 議論やコミュニケーションによる 知の実装化

## PHASE2

## 解説

知のパワーを活かした社会づくりを進めるためには、そうした知に多くの人が触れて、活かしていくようなアクセスポイントを社会の中につくっていくことが肝要です。大学は、これまで公開講座や共同研究といった形でアクセスポイントとなろうとしてきましたが、さらに円卓会議や協働事業、コ・ワーキング、クラウドサービスなど多様な形でアイディアを広げていく必要があります。あるいは自動運転技術の発達に伴い、キャンパスそのものが移動するような未来を想像してもよいかも知れません。そうしたアクセスポイントにおいて、研究者、あるいは大学で俯瞰的な視点を身につけた参加者は、答えを提示する存在ではなく、それぞれの課題に当事者としてかかり、知を活かし、あるいはその知をさらに育てるような議論やコミュニケーションを進める役割を担うことになります。このとき、知の「実装」というものも、知そのもののダイナミックな展開のプロセスとして捉える視点が重要です。そうすれば、製品化などの端的なゴールだけでなく、アフターケアのように、その後にも続く関係継続の大切さもおのずと見えてきます。

## 茨城大学の到達点と課題

## 「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」によるレビュー

教育面における知の実装化という点では、茨城大学のカリキュラムの最大の特徴ともいえる「iOP (internship Off-campus Program) クオーター」が挙げられます。これは、国内外のさまざまな場所での多様な学修活動を促す期間を全学的に定めたものです。この取り組みでは、学生が地域に出たり、地域の各方面の方と協働の活動を行うため、知のアクセスポイントが拡充する大きな可能性があります。また、大学の教育リソースを地域や高校へ持ち出すというコンセプトも重要です。その試みとして、「茨城大学1dayキャンパス」や、企業等向けのカスタマイズプログラムも提供する「茨城大学リカレント教育プログラム」の取り組みを積極的に展開しています。社会人向けには、その他に、大学院人文社会科学研究科の社会人コースや教職大学院などもあります。それらは現役の自治体職員や学校教員の実践的な研究・交流の受け皿となることで、大学のもつ知を政策などに活かす機能を果たしているといえます。研究面における知の実装化では、日立オートモティブシステムズ株式会社と包括協定を結び、自動運転技術等に関する共同研究や定期的な議論を行っています。また、

茨城県との連携のもと、茨城県地域気候変動適応センターが茨城大学地球変動適応科学研究機関(ICAS)内に開設され、茨城大学が長年蓄積してきた気候変動にかかる科学的知見を自治体等の適応計画の策定・運用に積極的に活かす体制ができました。これらの多様な取り組みが進んでいる一方で、ひとつひとつの取り組みが点在しており、大学自体のダイナミックな実践としては顕在化していない面がまだあります。また、共同研究などのネットワークが構築されても、それを地域の産業化やイノベーションへと昇華させていくためには、継続的な相談体制や広報との連携といったアフターケアを充実させるべきでしょう。また、アクセスポイントは増えているものの、そこにアクセスする人たちはまだまだ限られています。小さな子どもいる家庭、経済的に厳しい生活を強いられている方々、障害者など、さまざまな生活者を想定して、アクセスの機会を広げていくことが大切です。一方で、大学のリソースは限られることから、大学は何ができる、何ができないのか、地域社会から支援も得られないかという点の検討も必要です。





社会でダイナミックに  
作用する知の理論化・一般化、  
機能の組織化

## PHASE3 解説

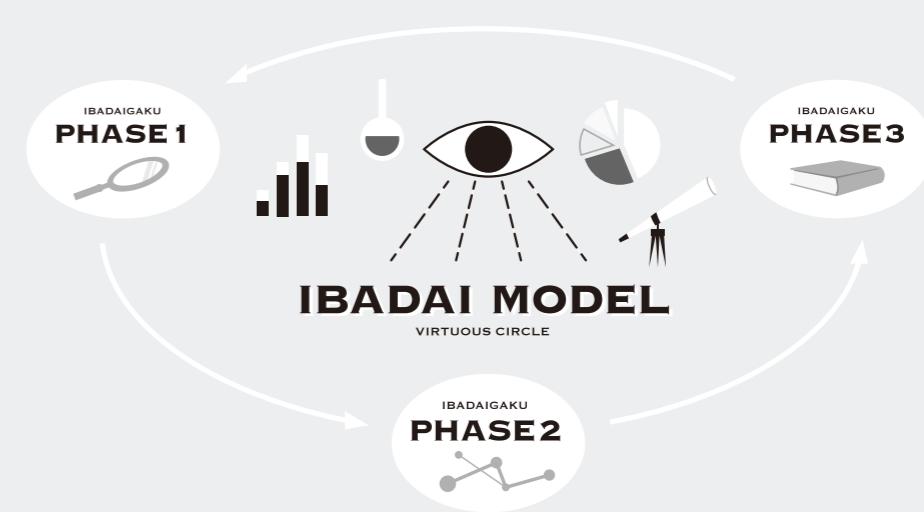
Phase 1、Phase 2を踏まえて、新たな知を創出していくのがPhase 3です。学術機関として、自らの取り組みと社会の変容を俯瞰的な視点で捉え、研究し、理論化していかなければなりません。また、知のアクセスポイントをさまざまな形で大学が創出するようになったとき、そうした大学の機能がサービスや商品のように地域の人たちが活用しやすいものになっていたり、そのノウハウが共有されていましたりすることが、大学の新しい姿を浮かび上がらせることになります。こうした流れが一般化・組織化されれば、知のアクセスポイントが持続的・自律的に機能する社会が生まれ、そのような創造的な社会における大学の存在は、社会基盤の鍵として大いなる期待をもって認識されることでしょう。

## 茨城大学の到達点と課題

「みんなの“イバダイ学”プロジェクトによるレビュー

茨城大学においては、このフェーズはまだ手が届いていない目標です。ひとつは、茨城大学の教育・研究の取り組みについて、地域社会全体を俯瞰する視点をもちながら分析・研究するような体制が必要といえます。この中では、地域を研究する機能と教育カリキュラムや研究体制を検討する機能との統合が必要といえます。こうした体制には、大学だけでなく、自治体や企業、NPO、金融機関など地域のさまざまな主体に今まで以上に参画いただくことが必要です。このような地域と協働した体制の下で進める教育・研究改革は、大学評価のあり方(評価指標)を変える可能性もあります。また、そうした確かなエビデンスをベースにして、大学構成員の間で自信をもってビジョンを共有する

ことが、大学組織を強くします。教職員のFDやSDについても、こうした視点で企画・運営することが大切であると考えます。また、Phase 2で例示したような知のアクセスポイント拡充の取り組みを組織化し、可視化することによって、地域社会の多様な人たちがサービスやアプリケーションとして利用・参加できる仕組みを構築することも重要です。こうして生み出される新たな知や、創造性を高めた地域の姿を積極的に発信することが、地域の誇りを高め、その推進力となる大学の価値をも高めると考えます。大学と社会との間のそのような循環のプロセスを、「イバダイ・モデル」として追究、発信していくことを目指します。



# 2018年12月22日、茨城大学水戸キャンパスで 「みんなの“イバダイ学”シンポジウム」を開催し、 学内外から約150人の方々にご参加いただきました。

【基調講演】

## 大学で学ぶということ

### —エセ(付度する)『主体性』に絡みとられないために

オックスフォード大学 社会学科およびニッサン現代日本研究所 教授  
苅谷 剛彦 氏

かりやたけひこ・1955年生。オックスフォード大学社会学科・ニッサン現代日本研究所教授。  
Ph.D.(社会学)。東京大学大学院教育学研究科教授を経て2008年から現職。  
著書に『オックスフォードからの警鐘—グローバル化時代の大学論』(中央新書ラクレ)など。



久しぶりに日本の大学の教壇に立つと、とても効率がいい講義であることに気ができます。声は教室の奥まで届く、黒板に書けば学生がみなノートに写し一斉に知識を蓄えてくれる。最後はそれを覚えたかどうか、試験で評価する。日本人に根付いた思考の型は、まさにここにあります。

日本の大学のルーツは、今から150年前、富国強兵と殖産興業をもとにした新しい近代国家づくりに原点があります。当時の日本では、内生的な知識で欧米の列強国に対抗できませんでした。日本は知識を外の世界へ求め、優秀な人材を海外に派遣し、また海外の教員たちを日本に招いて、新しい知識や技術を外国の言葉で学ばせることを始めたわけです。その受け皿となったのが帝国大学です。

当時のトップレベルの研究や教育は、西洋語で行われていました。



他の非西洋諸国は多くが植民地化されましたから、そこでエリートになるためには西洋諸国の言語を学んでいました。ところが日本では、帝国大学が設立されて20年ほどすると、その卒業生たちは教員として現在の私立大学にあたる専門学校などで、日本語で講義をするようになりました。講義録も日本語で出版され、知識の日本語化が急速に進んだのです。

大学教育が日本語化された一方で、“知識は外在する”という意識は変わらず、「学ぶ」=「知識を受容する」という認識が定着していました。

帝国大学を頂点とした知識の流れと教育の階層化はこうして生まれ、なかでも重要視されたのが法律の知識でした。近代日本は法治国家を作ろうとしたわけですから、法学的な思考が近代国家建設の基盤になったわけです。

日本における法学的思考は、外国の制度で良いものがあったら、その理念をもとにどう法律にできるかを考える、「演繹」的な思考様式が強かったと私は考えています。抽象的な命題から、抽象度を下げる思考。つまり、外国の法典や憲法という上位法があって、それを元に次の法律を考えるという方法です。これに対して、物事の考察には、現実から考えて理念を具体化していく「帰納」的な思考もあります。自然科学や社会科学は本来こうした「帰納型」の学問ですが、日本の社会科学も、海外の学者の理論や概念を日本に紹介することに長く研究の重きを置いてき

ましたから、「演繹型の社会科学」と言わざるを得ません。

本来なら、この演繹と帰納がうまく両立しながら物事を考えていくことが極めて合理的で論理的な考え方なのですが、日本は近代化のもとで、演繹型思考が勝っていくことになります。

抽象的なキーワード、それも流行り言葉を若干具体化して言い換えただけで、わかったつもりになってしまいます……私はそういう思考を「エセ演繹型思考」と呼んでいます。現実の経験からの帰納が不十分なまま抽象的な命題を理解したつもりになってしまいます。つまり、「大学の課題は何だろうか」と考える時、大学の経験や現状に基づいて課題を挙げるというよりむしろ、外から来たもっともらしい言葉になびいてしまう傾向に、今の日本の大学の大きな課題があるような気がします。それは文部科学省に従順であるべきか否かという話ではなく、思考様式がエセ演繹型ゆえに、新しいキーワードを与えられると、安易に「うん、そうだ、そうだ。新しく、これをやんなきゃね」と飛びつく傾向。まさに昨今流行語になった「付度」そのものです。

付度というのは、主体的な営みです。波風立てずに巧みに相手に取り入るために必要なスキル。皮肉なことに、変化の激しい現代社会で生きる上で、付度は極めて主体性のある行為と言えるでしょう。加えて、手段が欠如していますから、やり方がよくわからなないので解説本を見ようとする。すると、中途半端な説明、実践例しか書いていない。生半可な理解しかしていませんから、具体的な



处方箋は書けません。思考様式そのものを理解せず、わかったつもりでいるものの、その手段がルーズなので、目的を達成できる保証がないまま、結局、形式的なことだけを見せて達成できたつもりになってしまうという、最悪の事態が起きるわけです。

これは「アクティブラーニング」や「主体的な学び」といったワードも同様です。たとえば「主体」とは何か、という具体的な議論はないわけです。これでは、学生たちが大学を卒業後、社会で発揮するのは「付度する主体性」になってしまいます。帰国するたびに、そういう人材が増えている気がしてなりません。

大学で学ぶということは自分たちが世界の知識、ナレッジ(Knowledge)の生産や再生産に参加しているということを自覚すること、共有することです。



世界の礎と繋がっているという地続き的な感覚。大学は、トランジウムスナショナルな機関ですから、国家を超える知を作り出せる力を持っていることを誇りにしてほしいです。

日本の強みは、日本語という非常に難しい言語で、近代だけでも150年の経験をさまざまな分野で書き残してきたところにあります。そこには日本だけの経験、西洋語や他の言語を話す人たちにはない経験が培われています。これを活かさない手はありません。人類のナレッジの一角に日本の知識は参加していくのですから。

茨城大学をはじめ、多くの大学が創立70年を迎えます。その多くが大学教育の方向性を自問するなかで、私は、「目的のために何をするか」だけではなくて、「我々は、今までにこんなことをやってきた、成し遂げてきた」というみずから歴史と実績を振り返り、その事実の認定を評価の対象として帰納的に理念化していけば、おのずと大学のミッションは見えてくる

と信じています。大学がこれまでどのようにして社会の変化に対応してきたのか、または出来なかったのかを、歴史を踏まえながらきちんと検証することで、時代の波に右往左往せず、みずからミッションと「社会の変化に適応できる主体性」を發揮できる学生を育成できるのでは、ないでしょうか。



「みんなの“イバダイ学”シンポジウム」の後半は、イバダイ学を考える5つの問い合わせめぐり、グループに分かれて議論を行いました。それぞれの議論で示されたキーワードを紹介します。

\*肩書きは2018年12月当時のものです。

#### [イバダイ学を考える問い合わせ1]

### 残る「知」とは何か？

#### ファシリテーター

人文社会学科 准教授 乙部 延剛（政治学・公共哲学）  
教育学部 准教授 松村 初（グラフ理論）

#### ゲストスピーカー

アカデミスト株式会社 代表 柴藤 亮介さん



#### キーワード

- #「役に立つ」だけでなく「おもしろいか」かどうか
- #「勉強習慣」のような知的な態度としての知
- #知を生み出すための時間への理解
- #アカデミズムを社会基盤として捉える

#### [イバダイ学を考える問い合わせ2]

### 大学における『学び』とは何なのか？ —過去・現在・未来

#### ファシリテーター

教育学部 教授 佐藤 環（教育学）  
全学教育機構 助教 佐川 明美（高等教育における質保証・IR）

#### ゲストスピーカー

Institution for a Global Society (IGS) 株式会社  
中里 忍さん



#### キーワード

- #教育の質保証
- #能力に関するデータの可視化
- #目標—評価にとどまらない学びの過程への視点も必要
- #誰のための評価なのか
- #可視化できない学習

#### [イバダイ学を考える問い合わせ3]

### いばらきのイノベーションと雇用 一大学は何ができる？

#### ファシリテーター

研究・産学官連携機構 准教授 酒井 宗寿（物理化学・社会科学）  
全学教育機構 准教授 小磯 重隆（労働法学）

#### ゲストスピーカー

東大発イノベーション教育プログラム i.school ディレクター  
横田 幸信さん  
株式会社リバネス 人材開発事業部 サイエンスプリッジコミュニケーション  
環野 真理子さん



#### キーワード

- #地域資源の活用もベンチャーの定石に
- #他者を見ることでアイデンティティが形成される
- #大学はQuestionを訓練する場所、それをPassionまでつなげられれば教育は成功

#### [イバダイ学を考える問い合わせ4]

### グローバル化って しなきゃいけないですか？

#### ファシリテーター

全学教育機構 講師 濑尾 匠輝  
(教育社会学・言語教育)

#### ゲストスピーカー

宇都宮大学大学院 小波津 ホセさん  
株式会社納豆代表 宮下 裕任さん



#### キーワード

- #重要なのは語学スキルより自分自身のブランド
- #留学生の受け入れの経験を地域のグローバル化に活かす
- #根性とパッション
- #経済のグローバル化だけで語れない

#### [イバダイ学を考える問い合わせ5]

### 地域空間と大学—キャンパスは進化する？

#### ファシリテーター

工学部 講師 辻村 壮平（環境心理学）

#### ゲストスピーカー

YADOKARI株式会社 共同代表 ウエスギ セイタさん



#### キーワード

- #自動運転技術でキャンパスもモビリティに
- #大学施設とコミュニティの連携
- #界隈性をつくること
- #車内で講義できて夜はバーに変わる「イバダイ号」
- #参加型の建築

「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」は引き続き進行していきます。



ホームページ [イバダイ学](#) 検索 もぜひご覧ください。

URL <http://www.ibaraki.ac.jp/ibadaigaku/>

「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」運営メンバー（2019年3月現在）

乙部延剛 / 小池和人 / 小磯重隆 / 酒井宗寿 / 佐川明美 / 佐川泰弘 / 佐藤環 /  
澤田芳郎 / 濑尾匡輝 / 辻村壮平 / 松村初 / 間宮るい / 茂木智央 / 矢内結香 / 山崎一希

—茨城大学創立70周年-創基150周年記念事業準備室—